Japanaese Foundation for Multidisciplinary Treatment of Cancer JFMC

がん集学財団ニュース

Vol. 43

データベース事業と
医療機器事業を加え
さらなるがん治療の追求を

Data Base

Medical Equipment

Large-scale clinical trial

公益財団法人 がん集学的治療研究財団
〒136-0071　東京都江東区亀戸1丁目28番6号 タニビル3階　電話（03）5627-7593　FAX（03）5627-7595
E-mail jfmc.or.jp　HP http://www.jfmc.or.jp/

目次

Ⅰ 巻頭言

会　長　　山岸　久一 …… 1

Ⅱ 役員からのご挨拶

常務理事からのご挨拶　　常務理事　　桑野　博行 …… 2
新理事からのご挨拶　　理　事　　佐藤　好美 …… 2
理　事　　田邉　　稔 …… 3
理　事　　山上　裕機 …… 4

Ⅲ がん集学的治療研究財団における北島政樹先生のご功績をしのんで

…… 5

Ⅳ トピックス（新事業について）

1．JFMCデータベース事業 …… 6
2．医療機器事業 …… 8

Ⅴ JFMC臨床試験

1．現在進行中の臨床試験について …… 10
2．学会発表について …… 11
3．論文発表について …… 12

Ⅵ 一般研究助成研究助成事業

1．2018年度　第38回一般研究助成研究発表会及び第39回贈呈式 …… 13
2．2019年度　第39回一般研究助成研究発表会及び第40回贈呈式 …… 15

Ⅶ 市民公開講座を開催しました

1．2018年度“少酒”ではじめる生活習慣病・がん予防 …… 17
2．2019年度“多動”で生活習慣病・がん予防 …… 18

Ⅷ インフォメーション

1．賛助会員のお誘いとご寄付のお願い …… 19
2．ご寄付、賛助会員　ご協力者芳名録・バナー紹介 …… 21
3．ご寄付者、賛助会員様には …… 24
4．役員・評議員・委員名簿 …… 26
5．事務局インフォメーション …… 28

I 巻頭言

公益財団法人がん集学的治療研究財団
会長 山岸 久一
（京都府立医科大学 名誉教授）

これまで本財団の監事として６年間勤めさせていただきました小生ですが、2020年２月６日の理事会にて会長に就任いたしました。

まずは、前会長の北島政樹先生が強力なリーダーシップをもって本財団を運営されてこられた中で突然ご逝去されましたことに、心より哀悼の意を表すとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

さて、2019年の理事会で公益財団としての本財団の組織のあり方について議論になったことで、我々は検討に検討を重ね、ガバナンス、透明性、合議制を伴った組織づくりを行ってきました。その最中に北島先生がご逝去されたのですが、新たに就任された松本晃理事長と協力しながら、北島先生のご遺志を受け継ぐべく、現在も再編成に取り組んでいることをここにご報告させていただきます。

松本新理事長就任後には、2020年２月６日の評議員会において、和歌山県立医科大学附属病院病院長の山上裕機教授、東京医科歯科大学の田邉稔教授、そして小生の３名が新しく理事に選任され、同日の理事会で小生が会長をお引き受けする次第となりました。

さらに2020年６月23日の評議員会において、九州大学の森正樹教授と名古屋大学医学部附属病院病院長の小寺泰弘教授が理事に、東京医科歯科大学の杉原健一名誉教授・特任教授が監事に選任されました。また、新たに評議員に選任された藤田医科大学の宇山一朗教授には、本財団が取り組もうとしている医療機器事業にもご協力いただきたいと思います。こうした新たなメンバーを交えて、本財団はがん治療の推進にいっそう邁進していく所存です。

公益財団法人として最も重要なのは透明性であります。透明性ある財団運営を行うための一つとして、すべての事業運営は理事会における議決を経て、その承認のもとに進められなければならないと考えております。

その一環として、事務局体制についても、新人を加えるなどして刷新されたことで、それぞれの事業において、理事と各事業を担当する委員会、および事務局とのコミュニケーションがより円滑になりました。皆で一体となって財団事業を完遂する体制を形成していきたいと考えています。また、そうした意味でも、評議員、理事、各種委員会委員、事務局員には、組織体制の確立と充実化を心掛けていただき、そのうえで、それぞれの意思疎通を確実にしていただきたいと思います。

本財団は、公益財団法人として収益事業が公益事業を上回ってはならないことを十分に理解しながら、健全な組織運営の維持に努力すべく、評議員、理事、および各種委員会委員の皆々様のお力をお貸しいただきたく存じます。

また、事務局の皆様には、組織をひとつにまとめて、明るい運営に努めていただくよう、お願いいたします。

結びに、本財団への皆々様の益々のご支援をよろしくお願い申し上げることで、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

Ⅱ 役員からのご挨拶

常務理事挨拶

公益財団法人がん集学的治療研究財団
常務理事 桑野　博行
（地方独立行政法人福岡市立病院機構
福岡市民病院　院長）

歴史と伝統のある、そして我が国のがんの臨牀と研究さらに教育・啓蒙に多大なる貢献を重ねてきた、「公益財団法人 がん集学的治療研究財団」の理事、そして常務理事を引き続き拝命致しました。

必ずしも楽観視できない社会環境の中で、北島政樹会長の突然のご逝去は、当財団にとりましても、勿論、個人的にも多大なるご指導とご厚情を賜わった私自身にとりましても痛恨の極みであり、北島先生の深いご恩に報いる為にも粉骨砕身努力を重ねて参る所存です。ここに謹んで北島政樹先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。さらに、当財団にもこの上ないご貢献をされた前原喜彦前理事長もご退任され、きわめて厳しい状況にあります。しかしながら、新たにご就任された松本晃理事長のご指導のもとに、監事の先生方のご教示を賜りながら、理事、評議員そして事務職員の皆様とともに、当財団の発展の下に、我が国のがん医療とがん研究の推進をとおして医学界さらには社会への更なる貢献を目指してまいりたいと存じます。

前述のごとく厳しい客観情勢の中、以前から取り組んでまいりました様々な対応策を引き続き前に進めるとともに、新たな試みも模索しつつ事業を推進して参ります。臨床研究に対しては、平成29年４月７日に成立し、平成30年４月１日から施行された、「臨床研究法」の下に、ルールに則った、より厳密かつ丁寧な運用と管理が求められ、国民の信頼に資する臨床研究を展開する重要性がさらに増してまいりました。当財団としても、「がん臨床研究」の我が国における先端をゆく公的専門組織として、さまざまの臨床研究の推進を図るとともに、臨床研究における、IRB事業などをはじめとしたノウハウを提供してゆくことも使命と考えております。

そのような現況の下、私ども財団として、以下のことがらなどを見据えた事業を展開することが重要ではないかと考えております。

まずは当然ながら、当財団のメインの事業である、公益活動としての臨床研究の推進であります。様々の制約の厳しい中で、より質の高い、また実効性のある、そして何より、がんの集学的治療の進歩にきわめて有用で、患者さんにその恩恵をもたらすような、研究の展開が、今までも夥しい数の素晴らしい成果が成し遂げられては来ましたが、さらにその内容が問われることとなり、それにこたえるべき事業の推進が求められます。そのためには、医師主導臨床試験を実施するためのプロトコールの作成と遂行ができる資質に富んだ医師の参画と、その育成を図る必要があります。そして、当財団における、臨床研究・開発委員会の更なる活性化とその活用を図ってまいることが重要と思います。

次に、データベース事業の推進であります。現在はまさに「ビックデータ」の時代ともいえ、医学の世界においても様々の領域で展開されております。がんの領域においても、各施設が遂行している治療のデータを、最近急増している高齢者やさまざまの合併疾患を有することで臨床試験に登録が困難な患者さんも含めた、「リアルワールド」の貴重なデータをきめ細やかに集積、解析することによって、きわめて有用な質の高いエビデンスが得られる可能性があります。当財団としてもこのデータベース事業の推進には、すでに着手しておるところですが今後更に全力を尽くしてまいります。

更に、北島政樹前会長が推進してこられた医療機器など、薬剤に限らずに幅広い視野で臨床研究を推進してまいることも重要と認識致しております。

そしてこのような事業を展開してゆくには、財政基盤の充実と安定が前提となることは言をまちません。多くの施設、企業、さらには公的資金の獲得も視野に入れた運営に努力を重ねてまいる所存です。

皆様のご指導、ご教示そしてご理解を賜りながら、本財団の発展、ひいては我が国のがん医療の更なる発展に微力ながら全力で寄与致したいと考えております。皆様、何卒宜しく御願い申し上げます。

効果と効率、その両立に期待を寄せて

公益財団法人がん集学的治療研究財団
理事 佐藤　好美
（株式会社産経新聞東京本社
論説委員･新プロジェクト本部企画委員）

歴史ある「公益財団法人 がん集学的治療研究財団」の活動に、理事として参加させて頂くことになりまし

た。光栄に感じると共に、大任に身がすくみます。

前会長の北島政樹先生に初めて取材したのは、10年以上も前のことです。王貞治・福岡ソフトバンクホークス球団会長の胃がんを腹腔鏡で手術した、新しい医療技術の第一人者。その口から“カンポウ”の話が出て、ずいぶん驚きました。漢方薬の大建中湯（だいけんちゅうとう）の話でした。

ご自身が、生イカを食べて腸閉塞を患い入院。ところが、その時に使った西洋医学の薬が強すぎたり、不十分だったり、今一つ、ぴったり来ない。漢方薬の大建中湯を使ったところ、膨満感が取れて、予想以上の効果を実感した。だが、実感では不足だと、大建中湯を「DKT」と称して比較対照試験を実施。大腸がん手術を受けた469人を対象にDKTの効果を検証し、さらに投与群と非投与群で医療費の節減効果が１人平均14万円にも上ることを示したのだと、楽しそうに話してくださいました。

温故知新。最先端を走りながら、先入観にとらわれず、がん治療と新しいフィールドを融合し、よりよい治療を生み出していく人だと強い感銘を受けました。

素人の目からみると、医療技術は時として高度、高額である一方で、効果は既存の治療と差がないなど、開発自体が目的化して見えることもあります。追い求める先にあるべきは、「患者に優しい、よりよい医療」であり、そのエビデンスを共有することが標準化につながると、改めて認識したのでした。

私自身を振り返ると、1994年に旧厚生省の記者クラブに配属になったのをきっかけに、医療の取材を開始。その後も一貫して、医療、介護、年金など社会保障をカバーしています。

がん治療に特化して、この間のテーマを振り返ると、未承認薬の早期承認を求める患者さんの活動があり、がん検診の標準化と一般財源化がありました。診療報酬改定では、外科の手術件数に応じた（評判の悪かった）報酬設定があり、それに対して、外科系学会社会保険委員会連合（外保連）がエビデンスとともに試案を示しました。それが報酬改定に取り入れられたことは、プロフェッショナルオートノミーの発揮であり、時代を変える意義があったと認識しています。さらに、抗がん剤や緩和ケアの進展があり、昨年には、ゲノム医療が公的保険でスタートしました。がんは今や、「治る疾患になった」とも言われますし、この間のデータ整備により、治療の進展を見える化できるようになったことも大きな成果です。

一方で、公的医療保険への財政圧力は日増しに強まっています。医療は効果的であるだけでなく、効率的であることが求められています。私自身もオプジーボの登場をきっかけに高額薬剤を取材し、対象患者の適切な把握が迫られていることを実感。個別化医療やゲノム医療に強く期待を抱くようになりました。

昨年、この財団との出会いを頂きました。基本方針「患者に優しい効率的ながん治療法」を読み、改めて「患者に優しい、よりよい医療」を考えました。「患者に優しい」はよくある表現ですが、奥が深い。当財団は、①入院よりも外来②点滴よりも経口投与③治療効果に遜色がなければ、抗がん剤は高用量より低用量④臓器・機能を温存する低侵襲手術の開発――と、まさに分かりやすく、具体的に「効果的・効率的な医療」を謳っており、感じ入りました。

道は平たんではありませんが、医療を縮小均衡にするのではなく、開発技術を通して発展的均衡を実現できるかどうかが問われています。時代を先取りしてきた当財団が、今の時代にこそ力を発揮できるよう、微力ながら、お手伝いできればと思っています。

新理事としてのご挨拶

公益財団法人がん集学的治療研究財団
理事 田邉　稔
（東京医科歯科大学肝胆膵外科　教授）

この度、公益財団法人がん集学的治療研究財団の理事を拝命いたしましたことを光栄に存じます。私は1985年に慶應義塾大学医学部を卒業後、慶應義塾大学外科学教室に入室し、一般・消化器外科教授　阿部令彦先生、北島政樹先生、北川雄光先生のご指導のもと、主に肝胆膵外科における腫瘍学、低侵襲治療学、臓器移植学について、診療、研究、教育に研鑽を積んで参りました。特に、本財団の会長を務められた北島政樹先生には、公私にわたりご指導を賜りました。1991～1994年には米国ピッツバーグ大学のThomas Starzl教授に師事し、臓器移植の免疫学の研究に従事致しました。2013年より母校を離れ、東京医科歯科大学大学院肝胆膵・総合外科学分野教授に就任し、2015年には肝胆膵外科学分野と教室名を改め、現在に至っております。

理事就任にあたり、今後の本財団の果たすべき役割を見いだすために、これまでの歩みについて振り返ってみました。財団法人がん集学的治療研究財団は1980年（昭和55年）、厚生労働省医政局（当時の厚生省医務局）所管の財団法人として設立されました。当時の臨

床試験は企業依存型であり、データの質を高め研究資金の使途を明確化するしくみがまだ未熟でした。これらを改善すべく、中立的な第三者機関としての役割を当財団が担うことになりました。設立に当たって国内の製薬企業９社が発起人として加わり、厚生労働省が関与した経緯から見ても、社会的な必然性から本財団が設立されたことが覗えます。その後、1993年からProject Coordinating Systemを当財団の特定研究に導入し、スーパーヴァイジング・ドクターや担当医を支援する施設データマネージャーを置くことで、データの質は飛躍的に向上しました。このような発展の過程において、主に上部・下部消化管における多くの臨床試験が組まれ、その成果を上げて参りました。本財団における現在の主な活動内容は、がん化学療法・集学的治療に関わる多施設共同臨床研究の企画・実施、究助成、市民公開講座など多岐にわたります。

2018年に施行された『臨床研究法』では、より厳密な規則に則った臨床試験の管理・運用が求められるようになりました。研究不正を防止する一定の効果は期待されますが、一方で認定臨床研究審査委員会における審査、患者への補償、モニタリング・監査などにおける作業量や資金負担の増大、さらには違反した場合の指導・監督・懲役を含む罰則規定など、医療者への負担が著増したため、臨床研究へのハードルが極めて高くなったことも事実です。臨床研究の公明性を高めるという社会的なニーズを背景に、これまで本財団は質の高い多くの研究成果を発信して参りました。しかし、『臨床研究法』に代表される昨今の厳しい社会情勢の中、このままでは臨床研究が衰退してしまうのではとの危惧は、医療者の多くが抱いているのではないでしょうか。このような流れに打ち勝つために、中立的第三者機関である本財団の果たす役割は重要と思われます。まだまだ経験不足の私ですので、諸先輩のご指導を仰ぎながら進むべき道を見つけていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

がん集学的治療研究財団理事としての抱負

公益財団法人がん集学的治療研究財団
理事 山上　裕機
（和歌山県立医科大学附属病院　病院長）

みなさん、はじめまして。和歌山医大で外科学講座を担当している山上（やまうえ）と申します。私は肝胆膵外科、とくに膵臓癌の手術を専門とする外科医です。卒後から10数年は癌免疫療法や癌化学療法に興味があり、我流ですが、癌の基礎研究・臨床研究に従事してきました。2001年に外科学講座の教授を拝命し、その後の20年間はもっぱら手術に専念してきましたので、本財団の理事のお話があったときには、『なぜ私に？』と思いました。同時に、『私が本当に適任だろうか？』とも悩んだのですが、以下の理由でお引き受けすることにしました。

みなさんは、昨今の日本における臨床研究の現状をどのように考えられているでしょうか？　ディオパン事件以来、臨床研究に対する規制のハードルがむやみに上がってしまいました。もちろん、倫理指針に沿ってデータの質を担保し、患者さんの人権と安全を第一に考えて臨床試験を行うべきであることは論を待ちません。しかし、2018年４月に制定された臨床研究法により、さらに臨床試験のハードルが上がってしまいました。特定臨床研究とは、『薬機法における未承認・適応外の医薬品等の臨床研究、または製薬企業等から資金提供を受けて実施される当該製薬企業等の医薬品等の臨床研究』と定義されます。また、モニタリング・監査の実施、利益相反の管理等の実施基準の遵守及びインフォームド・コンセントの取得、個人情報の保護、記録の保存等が義務付けられていますし、厚生労働大臣の認定を受けた認定臨床研究審査委員会の意見を聴いた上で、厚生労働大臣に提出することを義務付けているものです。

すなわち、治験とほぼ同等の品質管理を要求されています。しかし、治験との大きな違いは、特定臨床研究の成果が承認申請に使用できないことです。治験は医薬品の承認申請を目的とした薬事法で行われるのに対し、特定臨床研究は新薬承認を目的としていないことが理由です。それでは、臨床研究法の出口は何でしょうか？患者さんに協力を頂きながら、医師が大変な苦労をし、莫大な費用をかけても、その成果は社会貢献しないのです。法律によって縛られているなら、そしてそれが悪法ならば、改善するのが社会正義です。

本財団はいままでも多くの臨床研究を遂行され、質の高い研究成果を国際発信されてきました。ぜひとも、本財団が中心となって、特定臨床研究の成果でもって承認申請を行えるように法律改正したいと願っています。私の力は微々たるものですが、諸先輩のご指導を仰ぎながら、私に与えられた使命を全うしたいと考えています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

Ⅲ がん集学的治療研究財団における 北島 政樹 先生のご功績をしのんで

2019年（令和元年）5月21日にがん集学的治療研究財団会長（当時）の北島政樹先生がご逝去されました。77歳でした。北島先生が当財団に求め続けたものを実現することが残された我々の使命であり、ここに謹んで当財団における北島先生のご功績を紹介させていただきます。

北島政樹先生は1966年（昭和41年）に慶應義塾大学医学部をご卒業。足利赤十字病院外科部長、杏林大学第一外科教授を務められた後、1991年（平成３年）に慶應義塾大学外科学教室教授に就任され、以後、同大学病院 病院長、同大学医学部長の要職を歴任。その後は国際医療福祉大学に移られ、学長、同大学三田病院 病院長、同大学熱海病院 総病院長に就任されています。国内外の関連学会および関連団体でのご活躍は枚挙にいとまがなく、わが国の外科学の発展に貢献され、多大な功績を築かれたことは皆様ご存知のとおりです。

当財団におけるご足跡としては、1993年（平成５年）に当財団理事、2002年（平成14年）に常任理事、2017年（平成29年）に会長に就任されました。会長就任のご挨拶では、「過去の実績にとらわれることなく、現実と未来を見据えることが大切」と訴えられ、財団の財産である全国的な研究組織のネットワークおよびがん臨床研究領域で築いてきたデータを活かしての新規事業である、薬剤と医療機器を併用した治療法の開発援助に意欲を燃やしておられました。

北島先生は多忙ななかで当財団の事業運営にご尽力いただき、理事会はもちろんのこと、研究開始時の説明会や数々の式典にもご出席いただきました。当財団の６つの、主に消化器がんに対する化学療法の効果についての臨床試験に直接携わられました。また、インターネットを活用した専門医の育成事業、がん医療の均てん化を図るための臨床研究推進事業でも力強いリーダーシップを発揮されています。がん集学的治療に関する一般研究助成事業の選考委員も務められ、数々の有望な研究を見つめ、応援してこられました。

一般研究助成 第35回研究発表会・第36回贈呈式の懇親会でご挨拶いただきました（2015年12月）

かねてから当財団の未来について北島先生は、「薬剤の臨床試験のみならず、当財団が培ってきた臨床試験事業のノウハウを活かして医療機器分野と連携する新事業を模索するべき」と諭してこられ、医療機器委員会の顧問として精力を注いでいただきました。現在、当財団は先生のご遺志を引き継ぐ形で、優れた医療機器をがん治療の現場に届けるための新規事業を展開しているところです。

「一生懸命だと知恵が出る。中途半端だと愚痴が出る。いい加減だと言い訳が出る」を生涯のモットーとされてきた先生はまた、「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵」の武田信玄の言葉を座右の銘とされ、個人の力量には限界があり、だからこそ他者との協調と、その広がりである輪が大切と常に説いておられました。

内外の多くの人から慕われてきた北島先生のご人脈は今も当財団の大きな力になっています。また、公益財団法人としてのガバナンスのあり方についても大局を見据えて提言されており、そのお教えは財団職員に受け継がれています。

北島先生のご指導を仰いだ当財団一同、その多大なるご貢献に深甚なる感謝の心を込めて、日本のがん治療の発展に益々尽力する決意を固めているところであります。

臨床研究JFMC43-1003（切除不能進行・再発胃癌症例に対するTS-1の連日投与法および隔日投与法のランダム化第Ⅱ相）の説明会でご質問される北島先生（2010年10月）

医療機器分野との連携の新規事業に情熱を燃やされていた北島先生には、医療機器委員会の顧問としてご尽力いただきました。写真は2019年４月の打ち合わせのワンシーンです

Ⅳ トピックス（新事業について）

がん集学的治療研究財団の新規事業（JFMCデータベース事業および医療機器事業）にご支援を

これまでの医療の発展の賜物として、人生100年時代の到来が現実のものになろうとしています。しかし、がんについて言えば治療法はいまだ開発途上にあり、新たな形の集学的な研究がますます必要とされています。がん集学的治療研究財団が現在進めている新規事業であるデータベース事業および医療機器事業へのご支援をお願いいたします。

理事長
松本　晃

❶ JFMCデータベース事業

がん集学的治療研究財団（JFMC）は1980年の設立から40年間、主に抗がん剤の臨床研究に携わってきました。国内約600の登録施設で胃がん、大腸がん、乳がん、肺がんについて多くの大規模臨床試験を行い、合計で37,000例以上が登録されています。データベース事業は、当財団に蓄積されたこれらのデータを統合してデータベースを構築し、その利用を通してがんの治療に役立つ情報を発信することを目的としています。

この事業は2017年に計画が始まり、趣旨に賛同頂いた企業様からの寄付金や、厚生労働省からの国庫補助を頂きながら事業を進めて参りました。手始めに過去に実施した大腸がん補助化学療法の臨床試験10試験（表１）の中からJFMC７、15、33、37の有効性、安全性データを統合し、ACCENT※データベースに提供しました。さらに、2019年３月にはJFMC35、38、41の３試験を追加した７試験のデータベースを作成しました。

本年３月には、新たに発足したデータベース事業支援委員会の指導の下に、上記データベースの内容をHP上で公開し、データベースを利用した研究の募集を開始しました。今後は集まった提案の中から優れた研究が行われ、その成果を論文・学会などで発表することで、がん患者さんに有益な情報を提供できると考えています。

※ACCENT（Adjuvants Colon Cancer End Points）：ステージⅡ～Ⅲの結腸がん患者に対するフルオロウラシルベースの術後補助化学療法に関する米国、欧州、豪州、カナダの18試験に登録された4,5000人のデータが集積されている。

研究番号	研究課題名	開始 年	月	終了 年	月	期間（月）	目標数	登録数	施設数
特定研究7	大腸癌術後補助化学療法剤としてのフッ化ピリミジン系薬剤の有用性に関する臨床比較試験	1986	2	1988	12	35	8128	3394	212
特定研究15	大腸癌に対する補助免疫化学療法および補助化学療法の有用性に関する臨床比較試験	1989	1	1990	12	24	5860	2315	227
JFMC33	StageⅡB/Ⅲ大腸癌に対する術後補助化学療法としてのUFT/LV経口療法の治療スケジュールに関する第Ⅲ相比較臨床試験	2005	10	2007	9	24	840	1071	233
JFMC35	術後補助化学療法におけるフッ化ピリミジン系薬剤の有用性に関する比較臨床試験	2006	4	2009	3	36	800	961	219
JFMC37	StageⅢ（Dukes'C）結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのカペシタビンの至適投与期間に関するランダム化第Ⅲ相比較臨床試験	2008	9	2009	12	16	1200	1306	330
JFMC38	pTNM stageⅡ直腸癌症例に対する手術単独療法及びUFT／PSK療法のランダム化第Ⅲ相比較臨床試験	2009	1	2011	12	36	540	111	62
JFMC41	StageⅡ/StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法の認容性に関する検討	2010	11	2012	3	17	800	882	196
JFMC46	再発危険因子を有するStageⅡ大腸癌に対するUFT/LV療法の臨床的有用性に関する研究	2012	5	2016	4	48	2820	1938	318
JFMC47	StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法における5-FU系抗がん剤お[illegible]化第[illegible]	2012	8	2014	6	23	1200	1313	242
JFMC48	再発[illegible]例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法の至適投与期間に関するランダム化第Ⅲ相比較臨床試験	2014	2	2017	1	36	500	525	101

7試験の統合DBを2019年3月構築終了

10試験　合計13,816例

表１　当財団がこれまでに行った大腸がん補助化学療法についての臨床試験

データベース事業支援委員会
委員長
吉川　貴己 先生
国立がん研究センター
中央病院　胃外科長

このたび、伝統ある、がん集学的治療研究財団に新設されました「データベース事業支援委員会」の委員長を拝命致しました、吉川貴己と申します。数々の大規模臨床試験を完遂され、エビデンスを創出してきた本財団で、重責ある立場に任命頂き、身の引き締まる思いです。また、副委員長には、「研究論文支援委員会」でご指導を頂いておりました坂本純一先生、ならびに、統計解析でお世話になっております大庭幸治先生を指名させて頂き、今後も、ご指導ご教授を賜る所存です。

当財団は、これまで、数多くの臨床試験を通して、本邦におけるエビデンスを創出し、標準治療確立の一助を担ってまいりました。当財団には、これまでに、個々の臨床試験に登録された患者個別の膨大なデータが保管されています。「データベース事業支援委員会」では、試験ごとに保管されているデータを抽出し作成された「統合データベース」を用いた「後ろ向き研究」を行うことで、新しい臨床情報を発信することにあります。

言うまでもなく、臨床試験は、検証した仮説の結果を論文として公表することで、完結します。しかしながら、新たな臨床試験の立案には、基礎となる「後ろ向き研究」の結果が大いに役立ちます。最も、質の高い「後ろ向き研究」は、臨床試験に登録されたデータを用いることです。まずは、大腸がんを対象として術後補助化学療法を行った臨床試験に登録された10,000例を超える「統合データベース」を用いて、解析を進めていく予定です。

当財団が保有する「統合データベース」は、広く、人類に還元されるべき、人類の共有財産というべきものです。この貴重な「統合データベース」を生かすためには、本邦のすべての研究者の英知をお借りしなくてはいけません。そこで、研究テーマについては公募することと致しました。応募頂いた研究テーマをもとに、「データベース事業支援委員会」で責任をもって解析し、論文化まで支援していく予定です。山岸会長のもと、坂本副委員長/大庭副委員長をはじめ、将来を担う新進気鋭の若武者７名とともに、活動していきます。今後とも、皆様のご支援ご指導をよろしくお願い致します。

❷ 医療機器事業

我が国の医療を、我が国のものづくり技術によって支える社会への転換の必要性

医療機器委員会
委員長 谷下　一夫
慶應義塾大学名誉教授

新型肺炎ウイルスの蔓延によって世界中が想定外の災難に直面しておりますが、医療崩壊の危機が懸念される中を、医療者の方々が精魂尽くして患者さんの診断治療にあたっておられ、心から敬意を表したいと思います。特に集中治療室で必須の装置である人工呼吸器やECMOなどの不足が指摘されている状況で思い出されるのが、2011年の医学会総会における医療機器展示企画です。この企画は、佐久間一郎先生（東京大学大学院工学系研究科教授）を中心に、進められており、著者も協力させて頂きました。企画の趣旨は、日本における医療機器の輸入超過に対する警鐘を鳴らす事で、日本の「医療機器自給率」を改善する事が、日本国の安全保障に繋がる事を主張する事でした。残念ながら東日本大震災で、医学会総会は中止になり、規模を縮小した展示会開催となりました。今回のような新型ウイルスの蔓延を予測する事は困難ですし、平時に人工呼吸器を大量に備蓄する事も現実的ではないかもしれませんが、少なくとも国家の崩壊を食い止める医療を確保するための医療機器を、外国に依存せずに調達できる体制を整備する事の重要性が今回の新型ウイルスの蔓延によって思い知らされている訳です。即ち、我が国のものづくり技術によって、医療現場で有用な医療機器を確保する事の意義が問われています。本財団では、故北島政樹先生のご提案によって、医療現場で有用な医療機器を創出する事を目的に、医療機器事業を立ち上げる事になりました。この事業では、医療現場を熟知しておられる医療者の皆様の医療ニーズやご要望を頂き、有用な医療機器の実現に繋げる事が中心となりますので、ご協力の程を何卒宜しくお願い申し上げます。

医療機器開発のための有用な情報提供に向けて

2019年に当財団会長としてご活躍のさなかにご逝去された北島政樹先生の「薬剤の臨床試験のみならず、当財団が培ってきた臨床試験事業のノウハウを活かして医療機器分野との連携をする新事業を模索するべき」のご遺志を受け継ぐ形で、当財団では医療機器等に関する試作品評価の受託事業および医療機器等の市販後調査の受託事業を行って参ります。

当財団がこれまで行ってきた研究事業は、主として医薬品企業からの研究要請であり、財政的にも医薬品企業によって支えられてきました。前述したように、がん治療のさらなる進展のためには新たな形の集学的な研究が必要とされており、がん治療に取り組んでいる企業は医薬品企業だけではなく、医療機器企業、体外診断用医薬品企業、再生医療等製品企業、IT企業等、多岐にわたります。

特に各種診断機器や内視鏡や腹腔鏡などの手術デバイス、放射線治療装置などの医療機器等の位置づけは年々高まっており、こうした医療機器、体外診断用医薬品、再生医療等製品および福祉機器（以下、医療機器等）の開発と改良は薬剤に比べて格段に速く、したがって市販後調査のニーズもはるかに多いのが特長です。

当財団の新規事業では抗がん薬領域で40年に亘って築いてきた全国1,000の医療機関、3,000名に及ぶ医療者とのネットワーク、及び市販後調査のノウハウを活用し、企業の皆様や医療者の皆様へ有用な情報提供を行うことが可能です。

医療機器事業を発足するにあたり記念講演会を行いました

当財団医療機器事業を開始するにあたり、事業内容を関係者及び関係各所に周知するため、患者様や医療機器事業に関わる皆様に向けて、有用な情報のご講演を頂きました。会場には当財団関係者・ものづくりの中小企業様・工学アカデミア・その他協会関係者の方々100名以上にご来場いただきました。

医療機器開発支援事業発足記念講演会
2020年1月30日（木）14:30〜17:10
アルカディア市ヶ谷私学会館　6階　霧島の間

がん集学的治療研究財団
常務理事 **桑野　博行**

当財団の沿革についてお話いただき、医療機器事業を目指した経緯についてお話いただきました。

経済産業省　医療･福祉機器産業室長 **富原　早夏**様

医療と工学の知識を持った人材の育成が必須であり、医療者と工学側（産業側）をつなぐ役割がますます重要になってくるとのご祝詞をいただきました。

がん集学的治療研究財団
医療機器委員長 **谷下　一夫**

医療機器事業を通じて、当財団が医工連携への取り組みを推進する意義についてお話いただきました。

招待講演1　医療機器における未来医療の展望

キヤノンメディカルシステムズ(株)　代表取締役社長
瀧口　登志夫様

キヤノンメディカルの歴史の中で特に大切にしてきたことは、「医工連携で臨床ニーズを把握し、それに応える医療機器を妥協せず開発し、実臨床でのエビデンスを集積すること」です。

未来医療においてもその取り組みは不変であり、医療技術の発展に伴う臨床ニーズの変化に機敏に対応し、医療従事者の皆様を通して「より良い」価値を提供し続けたいとお話しいただきました。

招待講演2　消化器外科におけるロボット手術の最前線

藤田医科大学 総合消化器外科　教授
宇山　一朗先生

ロボット支援手術を導入した経緯や手術に伴う合併症の研究についてご紹介いただき、「ロボット支援手術は患者様に一定の安全性の再現性を有する手術を提供できる」とお話いただきました。

医工連携については、医療者が日常診療で困っている事柄を収集し、製品に反映する取り組みの必要性についてご提言いただきました。

最後に、理事長 松本 晃 より、当財団の沿革についてお話いただき、医療機器事業にたどり着いた経緯をお話いただきました。また、当財団の持つネットワークを活用いただくことにより、医療機器等の新製品開発、市販後調査、製品の改良に貢献したいとお話いただきました。

画像診断機器が発達したことで術前・術後補助化学療法の効果がより的確に検証でき、患者予後に貢献していることなど、医療機器（診断機器・治療機器）と薬物治療は、がん治療およびすべての疾患の治療にとって車の両輪であり、双方が有機的に、効果的に結び付くことで治療の新たな扉が開いた例は枚挙にいとまがありません。

当財団ではこれまでの抗がん薬の情報に加え、医療機器等の有用な情報発信の機会をご提供するとともに、医療機器等の開発、改良の活動に貢献して参ります。

優れた医療機器をがん治療の現場に届けるための新規事業にご期待いただくとともに、同事業へのご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

V JFMC臨床試験

❶ 現在進行中の臨床試験について

1 臨床試験研究課題および集積・追跡状況一覧

1．最終報告書作成中の研究課題

JFMC	研究課題			班長
34	ホルモン陽性StageⅡ，ⅢA，閉経後乳癌に対するエキセメスタン24週間術前治療の有用性の検討（臨床第Ⅱ相試験）			戸井　雅和
	集積期間：2006.3-2007.12	追跡期間：～2018.8	論文作成中	
37 付随研究	結腸癌術後治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのカペシタビン投与期間延長によるHRQOLおよび医療経済性への影響の調査			福田　　敬
	集積期間：2009.1-2009.12	調査期間：～2014.12	論文作成中	
41 付随研究	StageⅡ/StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法の認容性に関する検討 －オキサリプラチンの安全性指標に関する策定研究－			大津　　敦 渡邉　聡明
	集積期間：2011.1-2012.12		論文作成中	
44	治癒切除不能な進行・再発胃癌症例における*HER2*の検討 －観察研究－			吉田　和弘
	集積期間：2011.9-2012.6	追跡期間：最終症例登録から3年後	論文作成中	
49	食道癌患者へのDCF療法時における成分栄養剤の口腔粘膜炎抑制作用の検討 －エレンタール®非投与群を対照群としたランダム化第Ⅲ相比較臨床試験（EPOC2 study）－			北川　雄光 吉田　和弘
	集積期間：2017.1-2019.8	追跡期間：～2019.11	最終解析中	
50	ロンサーフ（TFTD）使用症例の後ろ向き観察（コホート）研究			沖　　英次 山﨑健太郎
	集積期間：2017.6-2017.11		論文作成中	

2．現在、症例集積中・追跡中研究課題

46	再発危険因子を有するStageⅡ大腸癌に対するUFT/LV療法の臨床的有用性に関する研究			貞廣荘太郎
	集積期間：2012.5-2016.4	追跡期間：～2021.4	追跡中（1938例集積完了）	
47 （ACHIEVE Trial）	StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法における5-FU系抗がん剤およびオキサリプラチンの至適投与期間に関するランダム化第Ⅲ相比較臨床試験			森　　正樹 大津　　敦 吉野　孝之
	集積期間：2012.8-2014.6	追跡期間：～2020.6	追跡中（1313例集積完了）	
47 付随研究	StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法における5-FU系抗がん剤およびオキサリプラチンの至適投与期間に関するランダム化第Ⅲ相比較臨床試験　付随研究			森　　正樹 大津　　敦 吉野　孝之
	集積期間：2012.8-2014.12		893例　集積完了	
48 （ACHIEVE-2 Trial）	再発危険因子を有するハイリスクStageⅡ結腸がん治癒切除例に対する術後補助化学療法としてのmFOLFOX6療法またはXELOX療法の至適投与期間に関するランダム化第Ⅲ相比較臨床試験			前原　喜彦 大津　　敦 吉野　孝之
	集積期間：2014.2-2017.1	追跡期間：～2024.1	追跡中（525例集積完了）	
51	標準化学療法に不応・不耐の切除不能進行・再発大腸癌に対するTFTD（ロンサーフ®）+Bevacizumab併用療法の*RAS*遺伝子変異有無別の有効性と安全性を確認する第Ⅱ相試験			髙橋　孝夫 山﨑健太郎 沖　　英次
	集積期間：2018.1-2018.9	追跡期間：～2020.9	追跡中（102例集積完了）	

❷ 学会発表について

1．ESMO2018　2018/10　München

JFMC50-1701-C6：
Treatment pattern and outcomes of trifluridine/tipiracil therapy for metastatic colorectal cancer in the real-world data from the JFMC50 study
Kawakami T, et al.

2．第56回日本癌治療学会　2018/10　横浜

JFMC50-1701-C6：
Treatment pattern and outcomes of trifluridine/tipiracil therapy for metastatic colorectal cancer in the real-world data from the JFMC50 study
Yokota M, et al.

3．第105回日本消化器病学会　2019/5　金沢

JFMC50-1701-C6：
切除不能大腸癌に対するFTD/TPI療法の実臨床における治療成績の検討－JFMC50試験－
高橋直樹，山﨑健太郎，沖 英次，他

4．ESMO2019　2019/9　Barcelona

JFMC48-1301-C4：
ACHIEVE-2 Trial: A Randomized Phase III Trial Investigating Duration of Adjuvant Oxaliplatin-Based Therapy（3 vs 6 months）for Patients with High-Risk Stage II Colon Cancer
Yoshino T, Yamanaka T, Shiozawa M, et al.

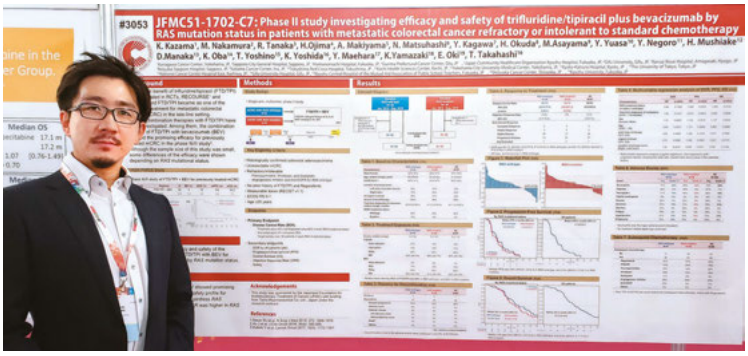
JFMC51-1702-C7：
JFMC51-1702-C7: Phase II study investigating efficacy and safety of trifluridine/tipiracil（FTD/TPI）plus bevacizumab（BEV）in patients with metastatic colorectal cancer（mCRC）refractory or intolerant to standard chemotherapies.
Kazama K, Nakamura M, Tanaka R, et al.

5．第57回日本癌治療学会　2019/10　福岡

JFMC51-1702-C7：
JFMC51-1702-C7: Phase II study of trifluridine/tipiracil（FTD/TPI）plus bevacizumab（BEV）in patients with metastatic colorectal cancer（mCRC）refractory or intolerant to standard chemotherapies.
Nakamura M, Shiozawa M, Tanaka R, et al.

ESMO2019 発表を終えて

神奈川県立がんセンター 大腸外科　風間 慶祐



このたび、2019年９月29日に、スペインのバルセロナにおいて開催されたESMO2019において、JFMC51の発表をさせていただきました。

ポスタープレゼンテーションでありましたが、ポスター会場は熱気にあふれておりました。恥ずかしながら自身はESMOへの参加は初めてでありましたが、ポスター発表の大部分が前向き臨床試験であり、ESMOの学会レベルの高さに驚きました。

Colorectal cancerの演題数は多く、ポスター発表においても今回発表させていただいたtrifluridine/tipiracilに関して多岐にわたる発表がありました。海外においても、front lineのみではなく、late lineの化学療法への関心の高さを感じました。また本邦からもtrifluridine/tipiracil + BVのmodified regimenの発表、front lineでの使用成績など、興味深い演題が並び、当発表へも様々な質問を頂きました。poster walkの緊張の１時間は、あっという間に過ぎてしまい、拙い私の英語力ではありましたが、当regimenの意義を、積極的に伝えられたものと信じております。そして当regimenが、今後の大腸癌化学療法late lineの主力として、今後使用されていくものと思います。

私自身は外科医でありますが、大腸癌領域に関しては手術と同様に、化学療法や外来での患者さんとのやりとりも、重要な治療の一環と強く感じております。化学療法の知識は今日の大腸外科にとって必須であり、今回の経験を活かし、今後も継続して化学療法への造詣を深めていければと考えております。

今回お忙しい中発表のご指導を賜りました研究代表者の高橋先生、山﨑先生、沖先生、統計解析責任者の大庭先生、JSCO演者の中村先生、またJFMC51試験担当の方々、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。誠に有難うございました。

❸ 論文発表について

1. Br J Cancer. 2019 Apr;120(7):689-696. doi: 10.1038/s41416-019-0410-0

JFMC37-0801：
Tomita N, Kunieda K, Maeda A, Hamada C, Yamanaka T, Sato T, Yoshida K, Boku N, Nezu R, Yamaguchi S, Mishima H, Sadahiro S, Muro K, Ishiguro M, Sakamoto J, Saji S, Maehara Y.
Phase III randomised trial comparing 6 vs. 12-month of capecitabine as adjuvant chemotherapy for patients with stage III colon cancer: final results of the JFMC37-0801 study

2. ESMO Open. 2019 Feb 27;4(1): e000476. doi: 10.1136/esmoopen-2018-000476

JFMC34-0601：
Ueno T, Saji S, Masuda N, Iwata H, Kuroi K, Sato N, Takei H, Yamamoto Y, Ohno S, Yamashita H, Hisamatsu K, Aogi K, Sasano H, Toi M.
Changes in Recurrence Score by neoadjuvant endocrine therapy of breast cancer and their prognostic implication

3. Surg Today. Aug;49(8): 704-711. doi: 10.1007/s00595-019-01787-9

JFMC39-0902, JFMC40-1001, JFMC42-1002：
Kono T, Shimada M, Nishi M, Morine Y, Yoshikawa K, Katsuno H, Maeda K, Koeda K, Morita S, Watanabe M, Kusano M, Sakamoto J, Saji S, Sokuoka H, Sato Y, Maehara Y, Kanematsu T, Kitajima M.
Daikenchuto accelerates the recovery from prolonged postoperative ileus after open abdominal surgery: a subgroup analysis of three randomized controlled trials

4. Cancer Chemother Pharmacol. 2019 Dec;84(6): 1269-1277. doi: 10.1007/s00280-019-03957-5

JFMC41-1001-C2：
Yoshino T, Kotaka M, Shinozaki K, Touyama T, Manaka D, Matsui T, Ishigure K, Hasegawa J, Inoue K, Munemoto Y, Takagane A, Ishikawa H, Ishida H, Ogata Y, Oba K, Goto K, Sakamoto J, Maehara Y, Ohtsu A.
JOIN trial: treatment outcome and recovery status of peripheral sensory neuropathy during a 3-year follow-up in patients receiving modified FOLFOX6 as adjuvant treatment for stage II/III colon cancer

5. JAMA Oncol. 2019;5(11):1574-1581. doi: 10.1001/jamaoncol.2019.2572

JFMC47-1202-C3：
Yoshino T, Yamanaka T, Oki E, Kotaka M, Manaka D, Eto T, Hasegawa J, Takagane A, Nakamura M, Kato T, Munemoto Y, Takeuchi S, Bando H, Taniguchi H, Gamoh M, Shiozawa M, Mizushima T, Saji S, Maehara Y, Ohtsu A, Mori M
Efficacy and Long-term Peripheral Sensory Neuropathy of 3 vs 6 Months of Oxaliplatin-Based Adjuvant Chemotherapy for Colon Cancer
The ACHIEVE Phase 3 Randomized Clinical Trial

Ⅵ 一般研究助成事業

本事業は、がんの集学的治療等に関する研究を一般から募集し、著名な先生方による厳正な審査の結果、選ばれた研究に助成金を差し上げています。

当財団設立時（1980年）から開始し、トータルで503名の先生方が受賞されましたが、受賞者の研究は後にその有用性がそれぞれの分野で評価されることも少なくなく、受賞者の60%以上（319名）は後に教授職に就かれています。

2019年からは、研究の斬新性や新たな視点や発想に基づいた研究の採用も考慮することになりました。

毎年12月に、前年度の受賞者の研究発表と、その年の受賞者に対する助成金の贈呈式を行っています。

2018年度　2018年12月14日(金)　於　アルカディア市ヶ谷 私学会館　霧島の間

第38回 研究発表会

研究発表１　座長：掛地 吉弘 先生

(1) *IDH1*変異が及ぼすDNA修復機構変化の解明と合成致死に基づく新規治療法の開発	横浜市立大学大学院医学研究科 脳神経外科学講座 助教　立石　健祐
(2) 消化器癌におけるサイトカインシグナルの機能解析	慶應義塾大学医学部 微生物学･免疫学 特任准教授　谷口　浩二
(3) 活性酸素安定効果を有する抗リウマチ薬サラゾスルファピリジンを併用した、食道癌に対する新規放射線治療の開発	九州大学病院別府病院 外科 講師　増田　隆明

研究発表２　座長：吉野 一郎 先生

(1) 生体肝移植による進行肝癌に対する至適治療適応拡大	九州大学病院 消化器･総合外科 講師　池上　　徹
(2) 腫瘍由来血中遊離DNAを用いたリキッドバイオプシーの結果に基づく切除不能・切除境界膵癌に対する集学的治療の個別化への試み	東北大学大学院医学系研究科 消化器外科学分野 非常勤講師　畠　　達夫
(3) 血中遊離DNAを用いた肺癌術後微小癌遺残の検出に関する研究	山梨県立中央病院 肺がん･呼吸器病センター センター長　後藤太一郎

研究発表の様子

研究発表における質疑

第39回 贈呈式

贈　呈　者	研　究　課　題
北　郷　　実 慶應義塾大学医学部 外科学教室（一般・消化器） 専任講師	浸潤性膵管癌切除症例に対する門注療法およびTS-1を用いた術後補助療法の第Ⅱ相試験（多施設共同臨床試験）
佐　藤　和　秀 名古屋大学高等研究院・名古屋大学大学院医学系研究科 呼吸器内科　S-YLC特任助教	光を用いた肺がん征圧への挑戦：DLL3をターゲットとした光励起治療・診断システムの開発
杉　町　圭　史 独立行政法人国立病院機構九州がんセンター 肝胆膵外科　医長	原発巣・転移巣・血液中遊離DNAの網羅的遺伝子解析による大腸癌肝転移に対する革新的な個別化治療の開発
高　野　重　紹 千葉大学大学院医学研究院 臓器制御外科　助教	癌分泌蛋白を含む微小環境と補体因子が及ぼす膵胆道癌進展機構の解明と治療開発
田　辺　真　彦 東京大学医学部附属病院 乳腺内分泌外科　講師	トリプルネガティブ乳癌からBRCAness乳癌を簡易的にスクリーニングする方法の探索と開発
宮　本　裕　士 熊本大学医学部附属病院 消化器外科　講師	切除不能大腸癌肝転移に対する人工知能を用いたCTテクスチャ解析による治療効果予測

ご　祝　詞

公益財団法人がん研究会有明病院 病院長　佐野　武

助成受領者代表挨拶

贈呈式の様子

2019年度　2019年12月13日(金)　於　アルカディア市ヶ谷 私学会館　穂高の間

第39回 研究発表会

研究発表１　座長：掛地 吉弘 先生

(1) トリプルネガティブ乳癌からBRCAness乳癌を簡易的にスクリーニングする方法の探索と開発	東京大学医学部附属病院 乳腺内分泌外科 講師 田辺　真彦
(2) 光を用いた肺がん征圧への挑戦：DLL3をターゲットとした光励起治療・診断システムの開発	名古屋大学高等研究院・名古屋大学大学院医学系研究科 呼吸器内科 S-YLC特任助教 佐藤　和秀
(3) 原発巣・転移巣・血液中遊離DNAの網羅的遺伝子解析による大腸癌肝転移に対する革新的な個別化治療の開発	九州がんセンター 肝胆膵外科 医長 杉町　圭史

研究発表２　座長：島田 光生 先生

(1) 切除不能大腸癌肝転移に対する人工知能を用いたCTテクスチャ解析による治療効果予測	熊本大学病院 消化器外科 講師 宮本　裕士
(2) 浸潤性膵管癌切除症例に対する門注療法およびTS-1を用いた術後補助療法の第Ⅱ相試験（多施設共同臨床試験）	慶應義塾大学医学部 外科学教室（一般・消化器） 准教授 北郷　実
(3) 癌分泌蛋白を含む微小環境と補体因子が及ぼす膵胆道癌進展機構の解明と治療開発	千葉大学大学院医学研究院 臓器制御外科 助教 高野　重紹

研究発表の様子

研究発表における質疑

第40回 贈呈式

贈　呈　者	研　究　課　題
岩槻　政晃 熊本大学大学院 消化器外科学　助教	胃癌腫瘍微小環境における血管新生阻害剤の腫瘍免疫応答賦活化を利用した治療法の開発
庄司　文裕 九州医療センター 呼吸器外科　医長	肺癌における体内細菌叢間相互作用と生物学的悪性度との関連性の解明－多施設共同による前向き観察研究－
髙森　信吉 九州がんセンター 呼吸器腫瘍科　医員	進展型小細胞肺癌患者における免疫チェックポイント阻害剤の効果予測因子としての栄養／免疫学的指標の臨床的意義に関する前向き観察研究
廣野　誠子 和歌山県立医科大学 外科学第２講座　講師	Circulating cell-free tumor DNA 解析による膵癌術前化学療法の効果予測
森根　裕二 徳島大学大学院医歯薬学研究部 消化器･移植外科学分野　准教授	腫瘍微小環境の癌関連線維芽細胞・マクロファージをターゲットとした治療法の開発

ご　祝　詞
愛知県がんセンター 名誉総長　富永　祐民

助成受領者代表挨拶

贈呈式の様子

Ⅶ 市民公開講座を開催しました!

「全国生活習慣病予防月間」市民公開講演会開催

公益財団法人がん集学的治療研究財団の公益事業の一環として、一般社団法人日本生活習慣病予防協会との共催により、生活習慣病予防に対する国民の意識向上と、これによる健康寿命の伸長を目指すべく、毎年２月の「全国生活習慣病予防月間」に合せ市民公開講座を開催しております。

《健康習慣のスローガン》

一無、二少、三多とは？

一無（いちむ）　「無煙・禁煙の勧め」

二少（にしょう）「少食・少酒の勧め」

三多（さんた）　「多動・多休・多接の勧め」

2018年度──「“少酒”ではじめる生活習慣病・がん予防」

二少（にしょう）「少食・少酒の勧め」

日時：2019年２月６日（水）13:30～15:45
場所：日比谷コンベンションホール

講演１）「アルコールとお口の健康」
演者：小林隆太郎先生
（日本歯科大学口腔外科 教授）

講演２）「少酒とがん予防」
演者：井上真奈美先生
（国立がん研究センター 社会と健康研究センター 予防研究部部長）

総合討論
演者：和田高士先生
小林隆太郎先生
井上真奈美先生
村田正弘先生
座長：宮崎 滋先生

共催　一般社団法人日本生活習慣病予防協会
公益財団法人がん集学的治療研究財団
NPO法人セルフメディケーション推進協議会

後援　厚生労働省
公益財団法人健康・体力づくり事業財団
健康日本21推進全国連絡協議会
公益財団法人日本糖尿病財団
公益財団法人循環器病研究振興財団

後援　公益社団法人アルコール健康医学協会
一般社団法人日本臨床内科医会
一般社団法人日本肥満学会
一般社団法人日本肥満症予防協会
一般社団法人日本サルコペニア・フレイル学会
一般社団法人動脈硬化予防啓発センター
一般社団法人日本産業保健師会
一般社団法人日本くすり教育研究所
NPO法人日本人間ドック健診協会
日本成人病(生活習慣病)学会
糖尿病治療研究会
日本健康運動研究所
九州ヘルスケア産業推進協議会
読売新聞社

協賛　サラヤ株式会社
株式会社タニタ
大正製薬株式会社
リボン食品株式会社
森永乳業株式会社
株式会社MDPS

2019年度──「“多動”で生活習慣病・がん予防」

三多（さんた）「多動・多休・多接の勧め」

日時：2020年２月５日(水) 13:30～15:45
場所：日比谷コンベンションホール

講演１）「生活習慣病の効果的な予防策～運動を中心に考える」
演者：田中喜代次先生（筑波大学 名誉教授）

講演２）「運動でがん予防」
演者：津金昌一郎先生
（国立がん研究センター 社会と健康研究センター センター長）

総合討論
演者：和田高士先生（日本生活習慣病予防協会 副理事長）
田中喜代次先生
津金昌一郎先生
村田正弘先生
座長：宮崎 滋先生

共催　一般社団法人日本生活習慣病予防協会
公益財団法人がん集学的治療研究財団
NPO法人セルフメディケーション推進協議会

後援　厚生労働省
公益財団法人健康・体力づくり事業財団
健康日本21推進全国連絡協議会
公益財団法人日本糖尿病財団
公益財団法人循環器病研究振興財団
公益財団法人8020推進財団
公益社団法人アルコール健康医学協会
一般社団法人日本臨床内科医会
一般社団法人日本肥満学会
一般社団法人日本肥満症予防協会
一般社団法人日本サルコペニア・フレイル学会
一般社団法人動脈硬化予防啓発センター
一般社団法人日本産業保健師会
一般社団法人日本くすり教育研究所
NPO法人日本人間ドック健診協会
糖尿病治療研究会
日本健康運動研究所
九州ヘルスケア産業推進協議会

協賛　サラヤ株式会社
大正製薬株式会社
株式会社タニタ
リボン食品株式会社
森永乳業株式会社

Ⅷ インフォメーション

❶ 賛助会員のお誘いとご寄付のお願い

がん集学的治療研究財団は、昭和55年（1980年）に創立以来、主体となる臨床試験の実施の他、がん研究に携わる医学関係者を対象に広く、学術研究の助成援助、活動支援、社会に向けての啓発活動など、がん治療にまつわる様々な活動を行って参りました。

これまで行われた公益事業は、皆さまからのご寄付と賛助会費を基に運営しておりますが、がん治療の進展に対するさらなる貢献を目指し、過去の臨床研究結果を集積して研究を行う「データベース事業」も開始しております。当財団の設立趣旨、今度の活動にご理解を賜り、ご支援、ご協力を賜れますと幸いです。

皆様から寄せられた「想い」を、次のような事業で展開しています

ご寄付、賛助会費の使途例

データベース事業

2017年（平成29年）より本事業の検討を開始以来、皆様からのご賛同とご支援を頂き、更に本事業の有用性は、厚生労働省にも認められ、平成30年度の「臨床効果データベース整備事業」として採択され、補助金を得ました。これらの資金をもとに、当財団に蓄積された臨床試験データを統合した大腸がんのデータベースを構築し、その一部は海外の研究グループから求められ、データベースの統合に協力いたしました。

2020年からはこのデータベースを使用した研究を広く一般から公募し、研究を進めております。

一般研究助成事業

がんの集学的治療に関する研究を広く募集し、選考委員会による厳正な審査の上、助成金を贈呈してきました。本事業の主目的はトランスレーショナルリサーチによる基礎研究の臨床応用であります。

最近は、病理や疫学・統計テーマに加え、現場の医療に直接役立つ分野へも募集範囲を広げており、毎年多数の応募を頂いております。

また、採択研究課題の一部は、当財団の多施設共同研究にも採用され、患者にやさしい「がん治療法」として貴重な成果を得、多くの国際学会や外国雑誌へも投稿してきました。

助成金の贈呈式の様子
（研究発表会も同日開催）

市民公開講座事業

2014年から、一般社団法人日本生活習慣病予防協会との共催により、市民公開講座を開催してきました。生活習慣病はがん発生要因の主役とも考えられ、環境汚染を含めた広範囲の対策ががん予防の面から必要とされています。幸い、厚生労働省からも共催を頂いており、毎年２月初旬に参加費無料で「全国生活習慣病予防月間」の時期に国民の皆さんの自己啓発に役立てて頂くべく開催しています。是非ご参加下さい。

刊行物出版事業

当財団の公益事業活動を、可及的に不特定多数の国民の皆様にご紹介するため、下記の刊行物等を出版してきました。

がん集学財団ニューズ

がん治療のあゆみ

メールマガジンの配信

講演会事業

当財団では、全国の医療者・医療現場との密なネットワークを有しているため、医療現場で活躍される医師などを招いた講演会を開催し、有用な情報発信を行っております。

医療関係者をはじめ、一般の方にも参加頂けるよう、参加希望者を広く募集しております。

参加者からは、第一線に立つ医療者・医師と意見交換ができる貴重な機会であったとの反響をいただいております。

頂戴しました寄付・賛助会費は
今後のがん治療発展のために有効に活用させていただきます。
今後もがん患者さんに優しい「がん治療法」の向上を目指してまいりますため、
皆さま方からのご支援・ご協力をお願い致します。

❷ ご寄付･賛助会費芳名録

（和令2年4月～）

＜企業・ご寄付者＞

ＥＰテクノ株式会社
大塚製薬株式会社様
小野薬品工業株式会社様
カナヤ医科器械株式会社様
サクラグローバルホールディングス株式会社様
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社様
大鵬薬品工業株式会社様
中外製薬株式会社様
三橋産業株式会社様

＜病院・ご寄付者＞

錦病院様
うえの病院様
神代医院様
小西第一病院様
那珂川病院様
福岡山王病院様
今村病院様
柿添病院様
うえお乳腺外科様
日田中央病院様
小田代病院様

＜企業・賛助会員＞

朝日生命保険相互会社様
エーザイ株式会社様
オリンパス株式会社様
カルビー株式会社様
キッコーマン株式会社様
株式会社サイバーリーガルクエスト様
サクラグローバルホールディングス株式会社様
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社様
大日本住友製薬株式会社様
株式会社ツムラ様
ミドリ安全株式会社様

＜病院・賛助会員＞

八王子消化器病院様
埼玉医科大学総合医療センター様
千葉県がんセンター様
千葉大学大学院医学研究院様
船橋市立医療センター様
君津中央病院様
東邦大学医療センター佐倉病院様
北里大学病院様
聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学様
聖マリアンナ医科大学 呼吸器外科学様
揖斐厚生病院様
岐阜市民病院様
岐北厚生病院様
下呂市立金山病院様
高山赤十字病院様
多治見市民病院様
岐阜県立多治見病院様
総合犬山中央病院様
松波総合病院様
浜松医療センター様
磐田市立総合病院様
静岡市立清水病院様
市立島田市民病院様
豊橋医療センター様
藤田医科大学様
京都第一赤十字病院様
淀川キリスト教病院様
佐野病院様
製鉄記念広畑病院様
津山中央病院様
福山医療センター様
吉野川医療センター様
三豊総合病院様
松山市民病院様
済生会西条病院様
高知大学様
福岡市民病院様
福岡東医療センター様
九州がんセンター様
製鉄記念八幡病院様
伊万里有田共立病院様
熊本医療センター様
熊本赤十字病院様
鹿児島厚生連病院様
今村総合病院様
今給黎総合病院様

私たちは、（公財）がん集学的治療研究財団の活動を支援しています。

＜企業／ご寄付者・賛助会員＞

朝日生命
ETHICON PART OF THE Johnson & Johnson FAMILY OF COMPANIES
OLYMPUS
掘りだそう、自然の力。 Calbee
kikkoman
株式会社 サイバーリーガルクエスト
サクラグローバルホールディングス SGHC
TERUMO
ミドリ安全株式会社
山下医科器械株式会社

＜病院／ご寄付者・賛助会員＞

公益社団法人昭和会 今給黎総合病院・昭和会クリニック
公益財団法人 慈愛会 今村総合病院
保健医療機関 医療法人社団 如水会 今村病院 imamura hospital
伊万里有田共立病院
磐田市立総合病院 Iwata City Hospital
医療法人 うえの病院
医療法人 医理会 柿添病院
鹿児島厚生連病院
北里大学病院 Kitasato University Hospital
地方独立行政法人 岐阜県立多治見病院
Gifu Municipal Hospital 岐阜市民病院
JA岐阜厚生連 岐北厚生病院
国保直営総合病院 君津中央病院 Kimitsu Chuo Hospital
日本赤十字社 京都第一赤十字病院
独立行政法人国立病院機構 九州がんセンター National Hospital Organization Kyushu Cancer Center
医療法人盛和会 神代医院（くましろ いいん）
医療法人 小西第一病院 Konishi Daiichi Hospital Fukuoka
小牧市民病院 Komaki City Hospital
埼玉医科大学総合医療センター Saitama Medical Center
医療法人薫風会 佐野病院
静岡市立清水病院 SHIZUOKA CITY SHIMIZU HOSPITAL

＜病院／ご寄付者・賛助会員＞

市立島田市民病院 Shimada Municipal Hospital
社会医療法人 製鉄記念広畑病院 STEEL MEMORIAL HIROHATA HOSPITAL
社会医療法人 製鉄記念八幡病院
聖マリアンナ医科大学病院
社会医療法人 志聖会 総合犬山中央病院
高山赤十字病院 日本赤十字社
社会医療法人厚生会 多治見市民病院
東邦大学医療センター 佐倉病院
一般財団法人 津山慈風会 津山中央病院
医療法人財団 中山会 八王子消化器病院
浜松医科大学 Hamamatsu University School of Medicine
浜松医療センター
医療法人 成宜会 日田中央病院 通所リハビリテーション さざんか ケアプランセンター さざんか
地方独立行政法人 福岡市立病院機構 福岡市民病院
独立行政法人 国立病院機構 福岡東医療センター
福島県立医科大学医学部消化管外科学講座 Department of Gastrointestinal Tract Surgery Fukushima Medical University
福島県立医科大学附属病院消化管外科 Fukushima Medical University Hospital Gastrointestinal Surgery
独立行政法人 国立病院機構 福山医療センター National Hospital Organization FUKUYAMA MEDICAL CENTER
藤枝市立総合病院 Fujieda Municipal General Hospital
船橋市立医療センター
社会医療法人蘇西厚生会 松波総合病院
三豊総合病院 Mitoyo General Hospital
Yoshinogawa Medical Center 吉野川医療センター
宗教法人 在日本南プレスビテリアンミッション 淀川キリスト教病院 Yodogawa Christian Hospital

ご寄付・賛助会員様からのバナー・ロゴ掲載について

当財団は、がんの研究にたずさわる医学関係者を対象に広く学術研究の助成援助を行い、併せてがんの治療成績向上に貢献することを目的として設立され、既に40年が経ち、主に臨床試験を行う機関として公益活動を行ってまいりました。このような公益事業は皆様からの毎年頂いております、賛助会費やご寄付などの浄財により成り立っているものであります。この度、ご協力を頂きました企業様、病院様には、ご支援のお礼を兼ねまして当財団の季刊誌であります、「がん集学財団ニューズ」や刊行物、ホームページにバナー・ロゴを掲載させて頂き、日頃から頂いております、多大なるご支援、ご協力に大変僅かではございますが、会員様のご紹介をさせて頂ければ幸いに存じます。

ご厚志ありがとうございました

❸ ご寄付者、賛助会員様には

ご寄付を頂いた方、賛助会員様には、以下のようなことを行っております。

季刊誌等の配布

当財団ニューズ・がん治療のあゆみ（一般研究助成の研究報告書）などをご郵送致します。

バナー（ロゴマーク）掲載

当財団の季刊誌やホームページにバナー（ロゴマーク）を掲載させて頂き、ご寄付者・会員様のご紹介をさせていただきます。

JFMCオリジナルノベルティの進呈

当財団の関係者のみにお渡ししております。
オリジナルマスクケースにマスクを入れて進呈しております。

メールマガジン配信

当財団の活動報告を１カ月に１回程度、配信をいたします。

イベントの参加

一般研究助成の式典、講演会などのイベントに優先的にご案内いたします。

ご寄付･ご支援をご検討の皆様へ

ご寄付

「ご寄付」はあくまでその時１回のみの金銭的なサポートで、期間もありません。
ご寄付は、いくらからでも受け付けます。

賛助会員

「賛助会員」は期間（１年間）があり、年会費の形でサポートをしていただきます。
賛助会では、当財団の事業運営の安定を図るために、多くの企業様、病院様に加入いただき、積極的にお力をお貸し下さることを心から呼びかけます。

がん集学的治療研究財団は、平成25年４月１日より国の認可を受けた公益財団です

当財団への寄付金については税制上の優遇措置がうけられる特権があります

ご寄付・賛助会員のお申し込みについて

ご興味のある企業・病院・個人の皆様は、下記までご連絡をお願い致します。
後日、申込用紙やご説明などをご郵送させて頂きます。
また、ホームページからもお申込書がダウンロード可能です。

〒136-0071 東京都江東区亀戸1-28-6 タニビル3F
公益財団法人 がん集学的治療研究財団　事務局　総務企画課
TEL：03-5627-7593　FAX：03-5627-7595
E-mail：soumu@jfmc.or.jp

ご寄付・ご支援をご検討の方は
こちらをご覧ください

当財団ホームページ

http://www.jfmc.or.jp/

ーがん患者さん及びご家族の福音のためにその役割を果たしてゆくことをお約束いたしますー

＜振込み口座＞

三井住友銀行　飯田橋支店　普通　2943719

＜口座名義＞

コウエキザイダンホウジン　ガンシュウガクテキチリョウケンキュウザイダン
公益財団法人　がん集学的治療研究財団

❹ 公益財団法人がん集学的治療研究財団 役員・評議員・委員名簿

役員・評議員

会長

山岸久一　京都府立医科大学名誉教授

理事長

松本晃　ラディクールジャパン株式会社代表取締役会長・CEO

常務理事

桑野博行　福岡市民病院院長

理事

今野弘之　国立大学法人浜松医科大学学長
小寺泰弘　名古屋大学医学部附属病院長
佐藤好美　産経新聞東京本社論説委員・新プロジェクト本部企画委員
田邉稔　東京医科歯科大学肝胆膵外科教授
藤田譲　朝日生命保険相互会社最高顧問
森正樹　九州大学大学院消化器・総合外科（第二外科）教授
山上裕機　和歌山県立医科大学附属病院病院長

監事

杉原健一　東京医科歯科大学名誉教授・特任教授
松本謙一　サクラグローバルホールディング株式会社代表取締役会長

評議員

相羽惠介　医療法人東光会戸田中央総合病院腫瘍内科部長
池田徳彦　東京医科大学呼吸器・甲状腺外科学分野主任教授
宇山一朗　藤田医科大学総合消化器外科学講座教授
大辻英吾　京都府立医科大学大学院医学研究科消化器外科学教授
掛地吉弘　神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野教授
北川雄光　慶應義塾大学病院病院長
島田光生　徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学教授
瀬戸泰之　東京大学医学部附属病院病院長
谷下一夫　慶應義塾大学名誉教授
辻晃仁　香川大学医学部臨床腫瘍学講座教授
土岐祐一郎　大阪大学大学院医学系研究科教授
藤原俊義　岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器外科学教授
松原久裕　千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学教授
三橋洋之　三橋産業株式会社会長
室圭　愛知県がんセンター副院長/薬物療法部部長
山本雅一　東京女子医科大学消化器病センターセンター長・消化器外科教授

名誉会長

茂木友三郎　キッコーマン株式会社取締役名誉会長

顧　問

名誉顧問

井口潔　九州大学名誉教授

顧問

池田義雄　（一社）日本生活習慣病予防協会名誉会長
佐治重豊　岐阜大学名誉教授

倫理委員会

委員長

塚田敬義　岐阜大学大学院医学系研究科医学系倫理・社会医学分野教授

委員

朝居朋子　藤田医科大学保健衛生学部看護学科准教授
後信　九州大学病院医療安全管理部教授・部長
桂川純子　豊橋創造大学保健医療学部看護学科准教授
北澤京子　京都薬科大学客員教授
小西敏郎　東京医療保健大学医療栄養学科医療栄養学科長・教授
佐藤雄一郎　東京学芸大学教育学部准教授

一般研究選考委員会

委員長

掛地吉弘　神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野教授

委員

北川雄光　慶應義塾大学病院病院長
坂本純一　公立学校共済組合東海中央病院病院長
島田光生　徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学教授
竹之下誠一　福島県立医科大学理事長兼学長
馬場秀夫　熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学教授
宮崎勝　国際医療福祉大学成田病院病院長
森正樹　九州大学大学院消化器・総合外科（第二外科）教授
吉野一郎　千葉大学大学院医学研究院呼吸器病態外科学教授

臨床研究開発・推進委員会

幹事会幹事

太田哲生　金沢大学医薬保健研究域医学系消化器・腫瘍・再生外科学教授
桑野博行　福岡市民病院院長
今野弘之　国立大学法人浜松医科大学学長
瀬戸泰之　東京大学医学部附属病院病院長
馬場秀夫　熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学教授
松原久裕　千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学教授
吉田和弘　岐阜大学大学院医学系研究科腫瘍外科教授

北海道・東北ブロック長

武冨紹信　北海道大学大学院消化器外科Ⅰ教授

北海道・東北委員

大塚幸喜　岩手医科大学医学部外科学講座准教授
小松嘉人　北海道大学病院腫瘍センター化学療法部診療教授
神宮啓一　東北大学大学院医学系研究科放射線腫瘍学教授
高畑武功　弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座講師
竹政伊知朗　札幌医科大学消化器・総合、乳腺・内分泌外科教授
内藤剛　東北大学大学院消化器外科学、乳腺・内分泌外科学分野特命教授
根本建二　山形大学理事・副学長
本多通孝　福島県立医科大学低侵襲腫瘍制御学講座教授
本間重紀　北海道大学大学院医学研究院消化器外科学教室Ⅰ講師
村田暁彦　青森県立中央病院がん診療センター外科統括部長
山下啓子　北海道大学病院乳腺外科教授
結城敏志　北海道大学病院消化器内科助教

関東ブロック長

植竹宏之　東京医科歯科大学大学院総合外科学分野教授

関東委員

青山徹　横浜市立大学医学部医学科外科治療学講師
明石定子　昭和大学医学部外科学講座乳腺外科学部門教授
市川大輔　山梨大学大学院医学工学総合研究部外科学講座第1教室教授
伊藤雅昭　国立がん研究センター東病院大腸外科科長
大家基嗣　慶應義塾大学医学部泌尿器科学教授
北山丈二　自治医科大学外科学講座消化器一般移植外科部門臨床研究支援センター教授
佐伯浩司　群馬大学院医学系研究科総合外科学講座教授
櫻井英幸　筑波大学医学医療系放射線腫瘍学教授
佐藤武郎　北里大学医学部下部消化管外科学講師
鈴木和浩　群馬大学大学院医学系研究科泌尿器科学教授
高張大亮　がん研究会有明病院消化器センター消化器化学療法科医長
多田敬一郎　日本大学医学部附属板橋病院乳腺内分泌外科部長
古畑智久　聖マリアンナ医科大学東横病院消化器病センター長・副院長
堀江重郎　順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学講座教授
山口研成　がん研有明病院消化器化学療法科部長
吉野孝之　国立がん研究センター東病院消化管内科科長
和田則仁　慶應義塾大学医学部一般消化器外科専任講師

中部ブロック長

竹内裕也　浜松医科大学外科学第二講座教授

中部副ブロック長

髙橋孝夫　岐阜大学大学院医学系研究科がん先端医療開発学講座特任教授

中部委員

上原圭　名古屋大学医学部附属病院消化器外科一病院講師
神田光郎　名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学講師
澤木明　藤田医科大学臨床腫瘍科准教授
中山吾郎　名古屋大学医学部附属病院消化器外科2講師
林真也　藤田医科大学放射線腫瘍科教授
伏田幸夫　金沢大学医薬保健研究域医学系消化器・腫瘍・再生外科学准教授
室圭　愛知県がんセンター副院長/薬物療法部部長
山口和也　岐阜大学医学部附属病院腫瘍外科特任教授
山﨑健太郎　静岡県立静岡がんセンター臨床研究支援センター治験管理部長、消化器内科医長
若井俊文　新潟大学大学院医歯学総合研究科消化器・一般外科教授

近畿ブロック長

掛地吉弘　神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野教授

近畿委員

加藤健志　大阪医療センター下部消化器外科科長
窪田健　京都府立医科大学外科学教室消化器外科学部門講師
黒川幸典　大阪大学大学院医学系研究科外科学講座消化器外科学講師
佐々木良平　神戸大学医学部附属病院放射線腫瘍科教授
佐藤太郎　大阪大学大学院医学系研究科先進癌薬物療法開発学寄附講座寄附講座教授
恒藤暁　京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 緩和ケア・老年看護学教授
中島貴子　京都大学医学部附属病院次世代医療・iPS細胞治療研究センター教授
中森幹人　大阪南医療センター消化器外科部長
西川和宏　大阪医療センター外科医長
松田武　神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野特命准教授
山田知美　大阪大学医学部附属病院未来医療開発部特任教授

中国・四国ブロック長

青儀健二郎　四国がんセンター臨床研究推進部部長

中国・四国副ブロック長

辻晃仁　香川大学医学部臨床腫瘍学講座教授

中国・四国委員

大毛宏喜　広島大学病院感染症科教授
杉山一彦　広島大学病院がん化学療法科教授
永坂岳司　川崎医科大学臨床腫瘍学教室准教授
西﨑正彦　岡山大学病院消化管外科講師
硲彰一　山口大学医学部先端がん治療開発学講座教授
檜井孝夫　広島大学病院遺伝子診療科特任教授
前田広道　高知大学医学部外科学講座外科1特任講師

九州・沖縄委員

相島慎一　佐賀大学医学部病因病態科学診断病理学教授
江口晋　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科移植・消化器外科教授
江﨑泰斗　九州がんセンター臨床研究センター臨床研究センター長
小林裕明　鹿児島大学大学院医歯学総合研究科生殖病態生理学教授
佐村博範　浦添総合病院消化器病センター外科下部消化管外科部長
徳永えり子　九州がんセンター乳腺科部長
馬場英司　九州大学大学院医学研究院九州連携臨床腫瘍学講座教授
馬場祥史　熊本大学大学院生命科学研究部次世代外科治療開発学寄附講座特任准教授
日高重和　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科腫瘍外科学分野准教授
吉満研吾　福岡大学医学部放射線医学教室主任教授

臨床試験審査委員会

委員長

坂本純一　公立学校共済組合東海中央病院病院長

委員

大庭幸治　東京大学大学院情報学環准教授
木村晋也　佐賀大学医学部内科学講座血液・呼吸器・腫瘍内科教授
辻晃仁　香川大学医学部臨床腫瘍学教授
三嶋秀行　愛知医科大学病院臨床腫瘍センター教授
森田智視　京都大学大学院医学研究科医学統計生物情報学教授

研究論文支援委員会

委員

青山徹　横浜市立大学附属病院外科治療学助教
大庭幸治　東京大学大学院情報学環准教授
柏原康佑　東京大学医学部附属病院臨床研究推進センター特任講師
神田光郎　名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学講師
坂本純一　公立学校共済組合東海中央病院病院長
本多通孝　福島県立医科大学低侵襲腫瘍制御学講座教授
前田広道　高知大学医学部外科学講座外科1特任講師
眞柳修平　慶應義塾大学医学部外科学(一般・消化器)助教
吉川貴己　国立がん研究センター中央病院胃外科科長

医療機器委員会

委員長

谷下一夫　慶應義塾大学名誉教授

委員

柏野聡彦　一般社団法人日本医工ものづくりコモンズ専務理事
鈴木由香　東北大学病院臨床研究推進センター国際部門部長、特任教授
昌子久仁子　神奈川県立保健福祉大学ヘルスイノベーション研究科教授
山本澄子　国際医療福祉大学大学院福祉支援工学分野教授
和田則仁　慶應義塾大学医学部一般消化器外科専任講師

顧問

中尾浩治　一般社団法人ジャパンバイオデザイン協会理事
松本晃　ラディクールジャパン株式会社代表取締役会長CEO

利益相反委員会

委員長

吉田和弘　岐阜大学大学院医学系研究科腫瘍外科教授

委員

梶谷篤　梶谷綜合法律事務所弁護士
矢永勝彦　東京慈恵会医科大学外科学講座消化器外科分野担当教授

財務委員会

委員

今野弘之　国立大学法人浜松医科大学学長
島田光生　徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学教授
田邉稔　東京医科歯科大学肝胆膵外科教授
谷下一夫　慶應義塾大学名誉教授
松原久裕　千葉大学大学院医学研究院先端応用外科学教授

臨床試験管理委員会

委員

河野浩二　福島県立医科大学消化管外科学講座主任教授
竹之下誠一　福島県立医科大学理事長兼学長
三嶋秀行　愛知医科大学病院臨床腫瘍センター教授

データベース事業支援委員会

委員長

吉川貴己　国立がん研究センター中央病院胃外科科長

副委員

大庭幸治　東京大学大学院情報学環准教授
坂本純一　公立学校共済組合東海中央病院病院長

委員

青山徹　横浜市立大学附属病院外科治療学助教
柏原康佑　東京大学医学部附属病院臨床研究推進センター特任講師
神田光郎　名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学講師
本多通孝　福島県立医科大学低侵襲腫瘍制御学講座教授
前田広道　高知大学医学部外科学講座外科1特任講師
眞柳修平　慶應義塾大学医学部外科学(一般・消化器)助教
山田康秀　浜松医科大学医学部臨床腫瘍学講座教授

(五十音順)

❺ 事務局インフォメーション

日頃より、各ご施設や企業様等、関係者の皆様には、当財団の事業活動にご協力を頂き有難うございます。

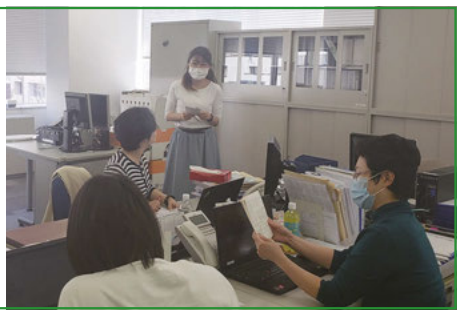
現在、がん集学的治療研究財団事務局では、４つの課に分けて組織を編成し、事業に取り組んでいます。職員のひとりひとりが、助け合い、コミュニケーションを大切に日々業務に励んでいます。

本号の事務局インフォメーションでは、各課としての取り組みや業務内容についてご紹介させていただきます。

テレワーク勉強会

臨床試験DM課

臨床試験DM課では、情報を共有し、効率的な業務の推進をしています。参加施設からの問合わせ対応、登録症例のデータチェックが主な業務です。また、学会発表、論文投稿時の事務的サポートを行っております。日常業務でお忙しい医師、データマネージャーの負担を少しでも減らせるように、日々業務に取り組んでおります。



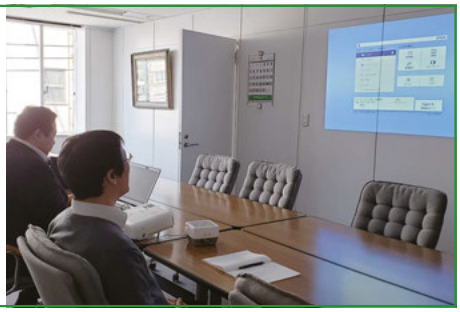
臨床試験支援課

臨床試験支援課では、主に臨床研究法に係る事務手続きを行っています。臨床試験にご協力をいただいているご施設には、管理者許可の取得やCOI、実施体制変更のご連絡など多大なご協力いただきありがとうございます。

今後もご協力の程よろしくお願い致します。

統計解析課

臨床試験データの集積後、研究目的にそった解析を行い、試験結果がわかるように表・グラフなどを作成します。
一日中PC画面に向かっての仕事ですが、アカデミアの第一線で活躍する先生方の助言を受ける機会もあります。こんな仕事に興味のある方を募集中です。



総務企画課

総務企画課は評議員会及び理事会など、当財団の運営に関する諸会議の主催、また、当財団の定款・規定等職員の人事、給与並びに広報、会計、システム管理と様々な業務を行っております。本年は故・北島政樹先生のご遺志を継いだ「医療機器事業」を実施予定です。新型コロナウイルスの拡大に伴い、ワークスタイルの変革が求められました。「戦略総務」として職場の様々なアイデアを実行し、課員一丸となり事業運営の活性化を図りたいと思います。

公益財団法人
がん集学的治療研究財団
事務局長 金子 正利

当財団は、厚生労働省医政局の所管の公益財団法人として設立されて以来、約40年に渡って、がんの患者さんの治療に福音をもたらすべく、主に皆様からのご寄付等の浄財を財源に患者さんに優しい治療法の研究を進めて参りました。

本財団の歴代理事長は、皆様から託された浄財を最大限に活かせるよう管理・運営してこられ、それぞれ在任された時代の要請に献身的に応える形で、40年間、本財団の運営を継承され、がん治療研究を育ててこられました。

近年に相次いで起きた臨床試験結果改ざん事件の後、臨床試験における利益相反の開示が厳格化されたことの影響から、当財団の事業運営も少なからず厳しくなったことは否めないのですが、製薬企業様のご理解のもと、臨床試験の契約を締結して実施することで、当財団が進める臨床試験についても必要な人件費や諸経費等をいただくことが可能になりました。これによって研究課の専門的職員を新期採用して補強できるようになりました。

公益財団である本財団は皆様からのご支援があってこそ事業を継続していけるのであり、事務局長としてここに厚く御礼申し上げるとともに、現在、進めているデータベース事業および医療機器開発支援事業を軌道に乗せるためにも、いっそうのご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

一方、この数年間は事業の透明性について見直しを進めた時期でもあります。公益法人としての当財団が、その透明性の確保について改めて問い直していく過程のなか、理事長の裁決に多くを委ねる従来型の指揮命令系統に少なからず問題があることが浮き彫りになり、これについては意見の行き違いもあったのですが、この２年間の取り組みによって新時代を見据えた体制に移行できたと、事務局長として確信しております。

具体的には、現在の臨床研究法のもと、当財団でも次のような整備・対策を提案しました。まず、必要な法規制の整備を行い、理事等の業務担当制を提案し、理事会での決定事業内容については、担当理事が当該事業に関係する各種委員会と緊密に連携し、また、当該委員会と事務局との有機的連携を可能にし、これによって、従来の理事長の裁決に委ねられる組織から、理事会における議決に基づいて運営される組織に一新されると思います。

現在もなお、会長、理事長、常務理事、そして理事の先生方のお力添えをいただきながら、本財団のハード面（組織体制）とソフト面（事務局内の整備）の再構築を進めているところでございます。

事務局内では、臨床試験DM課、臨床試験支援課、臨床試験統計解析課、総務企画課の４課に区分して、各課独立性を維持し相協力し業務を実施する組織体制を構築しました。今後はこの体制で臨床試験を実施していく方針です。

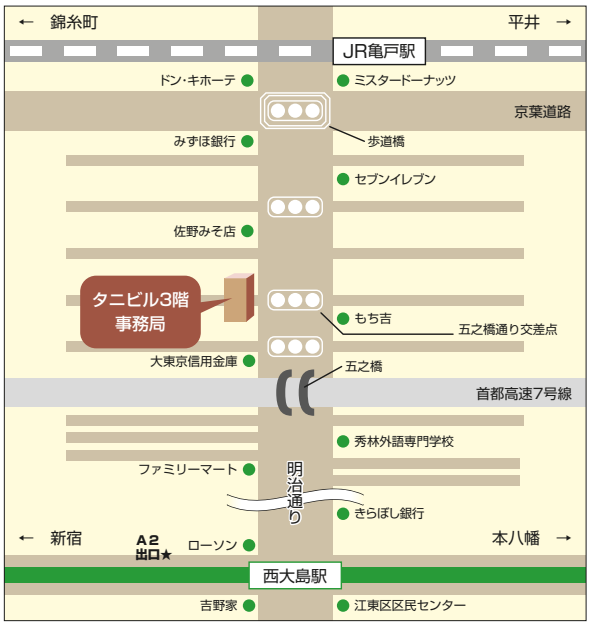
特にこれまで事務局内に臨床統計解析専門家がいなかったことで困難であった事務局内部での統計解析業務についても、現在では、統計解析の専門家を雇用して自計化を図っており、コストを大幅に削減した臨床試験の実施を可能としています。また、臨床試験支援課では、臨床研究法に基づき、各医師からのCOIに関する書類の回収や臨床研究法に準拠したSOPの整備等を適切に行っております。

本財団ではこのほか、故 北島政樹前会長からのご提案により、がんの患者様のために、薬剤の臨床試験のみでならず、医療機器事業も実施することになりました。実施には、上述の薬剤の臨床試験を行う課とは別個に、当面は医療機器事業経験者を加えた総務企画課が担当し、事業を進めていく予定です。

また、事務局ではシステム専門家を雇用して財団事務局のシステム化を図り、理事会等のWeb会議実現や事務局職員のテレワークの実施を可能にして事業経費削減を図っております。事務局内の各課の役割と活動については本誌28頁をご参照下さいませ。

こうして進めている業務体制の改善により、当財団では公益性・透明性をさらに確保して事業等を実施していく所存であり、薬剤の臨床試験および医療機器に関する研究のご依頼をお待ち申し上げております

皆様からのさらなるご支援を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



「亀戸の名の由来」

昔、この地は、亀ノ島と呼ばれ海上の島でした。早くから住民がいたようで、石器時代、古墳時代の遺跡があるといわれています。やがて、この島に亀村と呼ばれる村ができ、村にあった亀ヶ井という湧水が有名になりました。その後、この亀村と亀ヶ井が混ざって「亀井戸村」になったようです。江戸時代、「井」がなくなり亀戸村となったようです。

当財団までの経路

JR総武線 亀戸北口より、西大島駅方向に徒歩約7分
都営新宿線 西大島駅A2出口より、亀戸方向に徒歩約10分

＜編集後記＞

新型コロナウイルスの感染拡大で「緊急事態」が呼号される未曽有の危機的状況が続いています。暗いニュースばかり見て不安な気持ちになる日々を送っていましたが、ある時、毎日の生活に「喜び」を見つけようと思い始めました。それは、当財団で20年以上育てている**財団名物「榊」**から切った挿し木が根付き、３年の時を経て次々と新芽が生まれているのを見て、「現状に負けるな！」とのメッセージに感じたからです。

榊の語源については諸説ありますが、「常に葉が緑で栄える→栄える木」が転じたものであり縁起が良いとされており、新芽は新たな始まりと希望を予感させます。

本号は「新進」をテーマに編集しました。これまで培ってきた臨床試験データ及びネットワークを活用したDB事業、医療機器事業が本年より事業展開します。また、山岸会長、松本理事長、桑野常務理事及び当財団役員は新組織体制の構築に向けて準備を進めており、故北島政樹先生の御遺志を継いだ「和＝輪」を大切に職員一丸となって事業に取り組む所存です。

当財団に寄付・賛助会費をご支援いただいた皆様に感謝申し上げると共に、財団ニューズ43号発刊にあたってご寄稿を頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。

最後にウイルス対処に尽力いただいている医療関係者に感謝申し上げながら、皆様が、今この災時をご無事に乗り越えられるよう、ささやかですが、マスクを同封させて頂き、皆様のご健康を祈念申し上げます。

がん集学財団ニューズ

2020年７月　発行
発　行　人　松本　晃
発　行　所　公益財団法人 がん集学的治療研究財団
お問い合わせは下記にお願いいたします。
〒136-0071　東京都江東区亀戸1-28-6　タニビル3階
電話(03)5627-7593　FAX(03)5627-7595
メールアドレス　jfmc@jfmc.or.jp
ホームページ　http://www. jfmc. or. jp/
デザイン・編集協力　株式会社 コルボ
印　　刷　株式会社 粂川印刷